生活習慣形成と子ども同士の関係

浜口順子

「生活を保育へ」

本誌では、この一年ほど折に触れて「生活を保育へ」という特集を組み、「食べるということ」（第一〇六巻第三号）、「着替えるということ」（第七号）、「片づけるということ」（第十号）、「排泄するということ」（第十二号）、「『危ない』を知るということ」（第一〇七巻第一号）、「あいさつをするということ」（今月号）について現場の保育者や保護者、各方面の識者の方々に論稿を寄せていただいた。

保育において「生活」が重要な基盤であることはいまさら言うまでもないこと（幼稚園教育要領の第一章中に「生活」という言葉が九回も登場する）だが、実際には「生活」が個々の生活習慣の問題へ横すべりして語られることが少なくない。たとえば「遊びと片づけの間で保育者のかかわりの質が変わる」とか、「あいさつはしつけの部分が大きいから形から入るべきだ」など、子どもの主体性を促す場面としつけ場面との間の葛藤やジ

レンマが問題になる。

「生活を保育へ」の特集では、保育における生活習慣について、生活の全体性からとらえ直したいと考え、あえて衣食住関連の狭い生活カテゴリーで構成を試みた。

最近、「食育」「早寝早起き朝ごはん」など、子どもの生活改善への関心が高まっている。その重要性について異存はないが、幼児の生活の全体性と子ども自身の経験の視点が抜け落ちてしまうと、保育として望ましくない状況を生み出す危険性があると考える。

ここでは、園における子どもの生活の全体性をとらえる一つの試みとして、子どもの生活習慣形成周辺にある、ほかの子どもとのかかわりの意味について考えてみたい。園生活では、ほかの子どもとの相互交渉を通じて生活の意味づけをする場面が多く見られる。生活習慣の伝達において、大人がその主たる担い手となるのは当然である。しかし、子どもがそこに介在すると、大人の予期しないプロセスで子どもは生活習慣を含めた生活自体をわがものとしていく。保育における生活の創造について、排泄、食事に関連した事例をヒントに考えることとする。

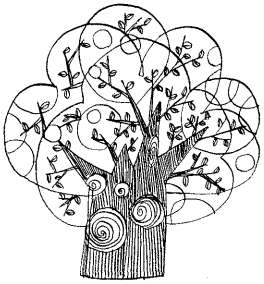
ほかの子どもと生活を共有する喜び

【事例一】 **じゅん**くん（三歳児）が、「おしっこ」とテラスで真っ赤な顔をしてジタバタしています。私があわてて「トイレ行こう」と**じゅん**くんの手を引っぱってトイレに走ろうとしたときに、いきなり**じゅん**くんは私の手を振りほどき、「先生はイヤ」と叫びました。今にももれそうなので、とても悲愴な声です。すると**しょう**くんが

「ぼくもいく」と、**じゅん**くんと手をつないでトイレに走っていきました。二人が並んで放尿。開放感に浸り、おしっこをしたままの姿で笑い合っています。（注1）

今にもおもらししそうな子どもの様子を見たら、保育者が手を引っ張ってトイレに連れて行こうとするのも無理はない。その切羽詰った状況で、なぜ**じゅん**くんは「先生はイヤ」と言えたのか、それともぎりぎりだったからこそ、先生の思いどおりになることがイヤと言えたのか。身体が思わず拒否してしまったのだろう。それは「悲愴な声」が表現している。排泄はしたいが、先生とはイヤ、という気持ちをこのとき保育者は受け止めようとした。

そのようなときの、保育者以外のほかの子ども（**しょう**くん）の働きかけは、自分だけで行くのでも無理やり引っ張られるのでもない、程よい、偶然の、主体的な経験の始まりとなった。そして、生理的解放感、自分で成し遂げたという達成感に加えて、友達と一緒に排泄する喜びを実感し、素晴しい排泄経験を心に刻み込んだと思われる。



パンツも上げずに友達と笑い合っている情景を写し取って書き留める、この保育者の確かな保育観を感じる。なぜ、これほど楽しかったのか。精神発達的に三歳の子どもにとって排泄の自立というテーマが生活の中で大きな位置を占めることは言うまでもない。しかし排泄という、大人にして

みればごく私的な営為を、共同的な喜びが作用して豊かな経験になるということがおもしろいと思う。それによってトイレットトレーニングが促進されるかどうかは本質的なことではないだろう。

このじゅんくんという子どもにとっての、生活を自分で切り拓けるという喜びと自信、排泄にまとわりついている文化的約束事やタブー性を友達と笑い飛ばしてしまうという解放感、そしてそれを興味深く見守って（見逃して）くれる保育者の存在感が大切だったように思われる。基本的生活習慣の形成の裏側にはいろいろな個人的なストーリーが潜んでいて、その多くを私たちは記憶の底に置き忘れてきているに違いない。

ほかの子どもと生活を共有する緊張

次に紹介するのは、保育者Mの幼稚園時代の回想記録である。やはり、子ども同士のやりとりからある生活習慣形成に向かう事例であるが、より葛藤的な経験となっている。

【事例二】　幼稚園では毎日お弁当を食べた。（中略）友達は、やさしくもあり、厳しくもあった。左利きの私に対して、母も先生も無理に右手に箸を持たせようとはしなかった。ところが、親切な友達は私をそのままにしておかず、「だめなんだよ」「右手にすれば」と注意したり、時には「がんばって」と励ましたりしてくれた。私は、そう言われるとしかたなく右手に箸を持って食べていた。

「どうして左手で食べてはいけないの！　何かおかしい！」という思いが沸き起こり、「私は左手で食べるからいいの！」と友達に言えるようなったのは小学校の中学年になったころだった。（注2）

生活習慣の習得プロセスに、親や先生ではない、ほかの子どもからの影響を受ける子どもがいる。大人が無理にやらせるしつけを警戒することはあっても、ほかの子どもによる「しつけ」的働きかけに対して大人はどの程度意識的であるだろうか。

この「友達」は、この記録部分の前段では、数日前の自分のお弁当のおかずと同じ塩鮭を入れてきたこの記録の筆者Mのお弁当を見て「真似したでしょ！」と非難的な言葉を投げかける。それによって、（事実を見抜かれた）Mは恥ずかしい思いをしている。しかし、Mはこの厳しくもやさしい「友達」がやはり好きなのだろう。大人が仕向けているわけでもないのに右手で箸を持とうと努力する。おそらくこの「友達」自身、監視的な大人の目にさらされ続けている子どもであって、その経験がこのようなMへの厳しいしつけ的行動に表れてしまっているのだろう。このような状況に保育者が気づくのは、たやすいことではないと思う。友達による「しつけ」的な働きかけは、その友達の背景にある大人たちの思いの反映でもある。友達の言葉を介して子どもが大人の世界に出会っていることもある。

何年かして小学生になったMは、左手で食べることを選択する。身体をいかに使うか、しかも「食べる」という基本的行為にかかわる身体の使い方についてどのような選択を自分でしていくかは、Mにとって「食」生活だけの問題ではなかったのだと考えられる。睡眠や排泄などと並んで、生理的レベルも含めた身体性と直接かかわる生活に関して、その身体の操作が自らの選択に従って自分のペースでできるという確信と見通しをもつ

という経験が、人の基本的な強さと関係してくるのではないか。

Mは自分の左ききを友達に指摘されて直そうと努力するが、「友達」に言われてする自分に、そして「食べる」身体性に加えられる外的な強制力に納得がいかなかったのではないだろうか。縄跳びや楽器を扱う手の問題とは、次元が違うのだと想像する。納得できない手で、食べ物（外側の世界）を自分の中に取り入れることの難しさを小学生になってはっきり認識できたのだと思う。食する手を右利きに変えることが、Mほど人生のテーマにならずに過ごす人もあるに違いない。個々それぞれのストーリーがあって、そこから利き手の問題も見守られなくてはならないのだろう。

子どもの生活を尊重するためには、もちろん大人がその生活づくりから手を引くのではなく、大人の生活ベースを枠組みとしつつ、子どもが自ら選択できる余地を守ることが必要なのだと思う。ただ大人が用意した生活に従うというのであれば、それは本能によって生活様式が継承されていく動物と変わらない。大人が示す生活の在り方を、子ども自身が納得して選択していく実感をもつことが、人間を人間にしていくのであろう。

（お茶の水女子大学）

註

1　藤野敬子「子どもにふさわしい園生活の展開とは」、森上史朗他監修、二〇〇一『保育方法・指導法の研究』ミネルヴァ書房、一〇三頁

2　宮里暁美「私が通った幼稚園・保育園3　思い出の味いろいろ」、二〇〇五、『幼児の教育』一〇四巻八号、フレーベル館、十五―十六頁）